

悩んでいる人に寄り添いの心を

3月3日（金）、町では「いのちの隣でできること～医療現場から～」をテーマに、町国際交流会館で自殺予防講演会を開催し、町民85人がいのちの大切さについて理解を深めました。

講演会は町の自殺対策事業の取り組みとして開催され、社団法人慈恵会青い森病院の平野敬之院長が、医学的な立場から自殺を引き起こす要因や予防法を講演しました。

平野院長は自殺予防の三大要因として「不眠」、「うつ」、「アルコール」を挙げ、その関係性を説明。「悩んでいる人がいたら1人にせず、寄り添うことが大切です。同じ思いをしている人は全員が味方です」と参加者に呼び掛けていました。



△講師を務めた青い森病院院長の平野院長



あなたの地区の楽しい催しや出来事などがありましたら、役場企画観光課まちづくり班（内線262）までお知らせください。

首都圏の女子大学生が青森をPR

県では首都圏の若年層の青森ファン獲得を目指す「田舎×kawaii 青森」プロジェクトの一環として、首都圏在住の女子大学生に青森県を体感してもらうツアーを行い、3月14日（火）には、陸奥鶴田駅でツル多はげます会と交流しました。

ツアーは本県の伝統工芸や郷土料理などを体験してもらい、青森県の魅力を女子大学生の視点で広く情報発信してもらうことが目的です。

青山学院大学4年の佐藤郁子さんは「青森の食べ物はおいしくて、地域によって方言が違うところなどが面白いです。私たちが体験した青森の魅力をたくさんの人に知ってもらい、青森に興味を持ってもらいたいです」と話していました。



△ツル多はげます会の会員の頭の吸引力に驚く参加者

災害時や高齢者の見守り等で協力

町では3月22日（水）、町内の3郵便局、五所川原郵便局と災害時の協力や高齢者の見守り活動等について相互連携する協定を結びました。

災害時には緊急車両の提供や避難所開設状況、避難者リスト等の情報を提供します。また、平常時には郵便局員が配達時に高齢者の日常生活で異変に気づいた際や道路の陥没、不法投棄などを見つけた場合、町に連絡する仕組みとなっています。

役場で行われた締結式では、松山保鶴田郵便局長が代表して協定書に調印。相川町長は「情報提供をしてもらい、町の安全安心を高めたい」と述べ、松山局長は「地域に根ざした郵便活動を町の安全安心のために役立てたい」と話していました。



△協定書に調印した松山局長（左）と相川町長



△フッドリバー市の訪問を終え、感想を述べる生徒の皆さん

フッドリバーでの思い出を報告

3月13日（月）から21日（火）までの期間で、姉妹都市・米国オレゴン州フッドリバー市を訪問した鶴田中学校の2年生23人が帰国し、22日（水）、町国際交流会館で解団式が行われました。

相川町長は「出発の時よりも、一回りも二回りも大きくなって帰ってきましたね」とあいさつ。鶴田中学校の工藤清秋校長は「フッドリバーの人たちと触れ合ってきたことを今後の人生に活かすことが大事ですよ」と生徒へ伝えていました。

生徒たちは「この訪問を機会に、積極的に自分を表現することの大切さを大事にしていきたい」「これからもっと英語を勉強して、またフッドリバーへ行きたい」と交流の感想を述べていました。

新しいワインの味はいかが？

道の駅つるた「鶴の里あるじゃ」を運営する鶴の里振興公社（永澤裕之社長）では、スチューベンを使った白ワインとスパークリングワインを開発し、3月29日（水）、新作ワインの誕生記念パーティーを町国際交流会館で開催しました。

この日は製造元のサンマモルワイナリーの北村良久社長や相川町長らが出席したほか、町内外から約150人が参加し、新作ワインの香りや味を楽しみました。参加した伊藤華奈さんは「スチューベンから白いワインが出来るのは不思議ですが飲みやすくおいしいです」と話していました。

白ワインは1500円、スパークリングワインは1300円で鶴の里あるじゃで販売しています。



△白ワインやスパークリングワインで乾杯する参加者の皆さん